

間接伝達と言 (Logos)

清水 茂雄

Indirect Communication and Logos

Shigeo SHIMIZU

序 論

すでに私はこれまでの研究でエックハルトの哲学の最も中核的思想である「突破」、「神性の闇」をめぐる言論が、自体的な何かある客観的實在に含まれるロゴスを写し取っているのではなく、それ故、その言論の理解のために伝達の問題と不離一体となっているある出来事についての理解が不可欠であることを示した。つまり、「神性の闇」をめぐる言論は間接伝達性を含んでいるため、そこにあるロゴスを直接伝達的なものとして受けとるなら、欺かれるのである。その理由として、私は、「神性の闇」とは實在性のあることがらを示す言葉ではなく、端的に非實在性（アンリアリティ）を示す言葉であること、更にそれは極限的な実存的真理であり、最も内面的な消息であるが故にキルケゴールの間接伝達の論理がいわば極限値的に適用されることを示した。

しかし、その研究に於いて私はキルケゴールとエックハルトの両者を包括するような形で間接伝達の間接性を明らかにすることはできなかった。そこでこの論文ではこの点を更に究明し、それによって「神性の闇」をめぐる言論が伝達を含めた上での真理であることをより一層明確にしてゆきたい。すなわちそれは絶対的真理ではなく伝達的、ないしは相対的真理であること、このことへと向かって探究してゆきたい。

第一章 キルケゴールの「間接伝達」に於ける間接性とは何か

キルケゴールに於いて間接伝達は二様に解されていると思われる。第一は、単独者がその実存的真理を伝達する場合。そして第二は、神人たるイエスが語る場

合である。前者の伝達様式は、キルケゴール自身の匿名による著者の形式と密接な関係があり、後者の場合、特に「つまずき」の問題と関係する。そこでそれぞれを分けて考察する。

(一) 単独者の伝達形式としての間接伝達

単独者、つまり神の前に罪という不連続を介して神と弁証法的に結びつこうとする実存の真理の伝達形式が間接伝達となる理由についてキルケゴールは、いわゆる「後書」の第二部第二章の一で詳しく説明している。その中でキルケゴールが挙げている例を取り上げ論究を始めよう。

「そこである人が、次のような確信を伝達しようと思ったと仮定する。真理とは内面性の問題であり、客観的に真理は存在しない。真理をわがものにすることが真理そのものである。と。そこで彼が、この確信を熱烈な感激をこめて——これを聞くことによってこそ人々は救われるのだから——語り出たとしよう。しかもそれをあらゆる機会をとらえては語り、そして多汗性の人間だけでなく、頑なな人々をも感動させたとしよう。……………そしてどうなるか？ 彼はその始めから犯してきた自己矛盾を、いっそう露骨にやってのけることになるだろう。というのもあの確信を熱烈な感激をこめて語り出たこと、そしてまた聞かせてやったこと、それがすでに誤解の始まりであったからなのだ。あの確信が理解されることこそ主眼であったはずだ。そして内面性の問題としての理解は、単独者がかの確信をば自己自身を実験台として理解することに他ならなかったはずである。」¹⁾

この引用はキルケゴールの間接伝達の内容を知る上で手引きとなるものである。この例に於いて我々は、第一に伝達される真理が具体的にどのようなもの

かを知ることができる。それは実存的真理と言われるものであり、「真理をわがものとする(自己化する)ことが真理である」ようなものである。第二に、間接伝達に対する直接伝達とは具体的にどのようなものかも知ることができる。それはつまり、「この確信を熱烈な感激をこめて」、「あらゆる機会をとらえては語り」、「感動させた」、と言われてるようにいわば「本心を吐露する」型の伝達といえる。これに対し、間接伝達とはかの確信を「理解させること」を目的とする。そして「理解する」とは「かの確信をば自己自身を実験台として理解すること」であると言われている。

以上、我々は間接伝達を思想を構成する肝要な諸契機をひとつの例において予備的にみたので、次に核心的問題を掘り起こして論じたい。

先の例に於いて我々は間接的に、なぜ実存的真理の伝達が間接的にならねばならないかをおぼろげに理解できる。この漠然とした理解の底にあるのは、ひとつの矛盾洞察と言え。つまり、この例の中の人物はある矛盾を犯しているのだが、その矛盾とは、彼が伝達しようとしている真理とその伝達の態度との間に存する矛盾である。しかし、実存的真理とその伝達形式の間に存する矛盾とは一体どのようなものかはキルケゴールの言葉だけからは判然としない。我々はこの不明瞭さの根が極めて深くまで伸びていることをやがて知ることになるが、今のところその不明確さを明らかにするように努力しよう。かの人物の犯している矛盾とは、彼の得ている真理そのものの中にすでに伝達形式を指示する本質的要素が含まれているのに、彼がその指示と対立する伝達を作したということではなければならない。つまり、実存的真理の中には何らかの意味で伝達の要素が本質的に含まれているのであり、しかもそうした伝達の要素を含むが故にそれは実存的真理であると言えるのである。これに対し、たとえば、「万有引力の法則」といった客観的真理の中には本質的要素として伝達のなものは何も含まれていない。それ故、それは直接的伝達とか間接伝達とかの指定を不要としているのである。

それでは何故、実存的真理の中に伝達の要素が本質的にくみこまれるのか、そしてそれはどのような形で入っているのだろうか。

この問いに対する答えはキルケゴールが別の箇所述べている「二重の内省」という言葉によってその系

口が与えられるだろう。彼は「二重の内省」をこう説明している。

「思考する者として彼は普遍的真理を思考する。しかし他方で彼はこの思考のただなかに身を置いて生き、これを自己の内面性をかけて獲得しようとするがゆえに、いよいよ主体的孤立を深めてゆくのである。」²⁾

「二重の」と言われる理由はこの説明から明らかとなる。つまり、実存は最初に普遍的真理を思考し、ついでその上にその真理を自己化する省察をする。それ故「二重」になるのである。そしてキルケゴールによると、真理の本質的要素として伝達のなものが含まれるのはこの二重の内省の後段によるのである。

「伝達の形式は伝達の表現と同一ではない。思想が言語によって正しく表現されることは第一段階の内省によって得られるところであるが、そこに達したときに第二段階の内省が生ずるのである。そしてこの内省こそ伝達そのものが伝達者に対してもつかかわりに向けられ、そして実存に生きる伝達者自身がイデーに対してもつかかわりを再現するのだ。」³⁾

このように、実存的真理は二重の内省という構造を持ち、そのうちの第二段階の内省、つまり、普遍的真理と自己が関わりあう場面、主体化の局面、そこに伝達のなものが必然的に入りこんでくるのである。

そこで、問題は次の点である。なぜ普遍的真理を自己化(主体化)する際、伝達のなものが本質的契機として内省に入りこんでくるのか。この問いを更に分析してみると、そこには次のような問いが含まれていることが分かる。すなわち、なぜ主体化という内省に於いて外部への伝達の欲求がそもそも生じるのか。真理を自分のものにするだけで満足できずに、その内省の歩みを外に伝えるとはどういう理由によるのだろうか。

この問題についてキルケゴールは「愛の告白」を例にして説明している。ある女性に対し本当の愛情を抱いている男性を考えてみよう。彼はたえずその愛を内面に留めておこうと思いつつもその愛を恋人に告白したいという矛盾の中にある。主体的真理も同じであって、真理が主体化されればされる程、外へ向かって伝達しようという欲求が起きてくるのである。

このキルケゴールの説明を更に検討してみよう。愛情を抱いている男性はなぜ本心を恋人に語ってはならないのだろうか。それはその愛情が内面化されているが故である。つまり「内面化」という事態は概念的に「秘すべき」という契機を含んでいるのである。しか

し、「秘密性」の概念はすでに伝達概念を前提している。それ故、内面化の道は同時に伝達への内省の道でもあるわけである。

以上で我々は真理の自己化の段階で伝達的なものがなぜ本質的要素として入りこんでくるのかという問いに答えることができたと言える。つまり、真理が自己化されるということは内面化されることであり、内面化とは秘密となることを意味する。そして秘密は伝達的な概念に基礎付けられているからである。

次に、主体化の過程で伝達的なものが入りこんで来るとして、その場合、なぜ主体的真理は間接伝達でなければならないのだろうか。

この問いは、すでに答えられていると言えよう。なぜなら、二重の内省の第二段階に於いて内面化される真理は秘密的真理として伝達されなければならないからである。そこに矛盾が在るのであり、この矛盾が間接伝達の間接性の根拠となっているのである。秘密を明かす、それは間接的伝達によってしかできない。ただし、ここで秘密と言われているものは、キルケゴールが言うように、本質的・秘密である。つまり、「出生の秘密を明かす」というような場合の「秘密」では全くないのである。

さて、では秘密が秘密として伝達されるとはどのようなことなのか。このことはすでに引用(1)の中に示唆されている。秘密が伝達されるとは、「内面性の問題として理解される」ことであり、「単独者がかの確信をば自己自身を実験台として理解すること」なのである。言いかえるなら、伝達者の二重の内省の運動が伝達を受けた者のうちに反復されることなのである。ここで大切なのはこの二重の内省の運動の反復は、いわば電磁誘導のような受動的なものでなく、能動的なものであるということである。こうして運動が反復されることによって秘密は秘密として伝えられるのである。キルケゴールはこの趣旨を次のように述べている。

「主体的実存に生きる思想家があゝの二重性によって自己自身の自由独立を獲得しているのに応じて、伝達の極意とは相手に自由独立を獲得させるところにこそあり、だからこそ直接的伝達の道をとることは許されぬ行為である。」⁴⁾

以上述べてきたところから、我々はキルケゴールの間接伝達を「秘密が秘密として伝達されること」と規定することができる。この規定の中には、まだ「なぜ秘密はその内に伝達を起こさせる契機を持っているの

か」、という問題が残されているが、目下のところこれについては究明しないこととする。

次に間接伝達を間接伝達として実行するには、どのような条件が要るのだろうか。二重の内省を遂行するすべての単独者が何かを語ればそれはすべて間接性が付与されるのだろうか。なるほど二重の内省を真に遂行すれば、伝達が間接的でなければならないことが認識され、それ故その者の伝達は必然的に間接伝達となる。しかし、この伝達にあずかる者は、二重の内省の運動をし始めることができるだろうか。この運動が必然的に生じるような伝達こそ間接伝達と呼ばれるにふさわしいだろう。このような間接伝達の間接性を現在化する条件のうちどうしても必要な規定は伝達内容が直接的には理解し難い、ということではなければならない。というのも、もし伝達内容が直接的に理解されるような性質のものであったなら、二重の内省の反復運動はそこで止ってしまうからである。

間接的伝達実現の条件についてキルケゴールは二つ挙げている。その第一のものとしてキルケゴールは次のように述べている。

「間接的伝達は、伝達を二重化する伝達術となることができる。つまりその術とは、伝達者たる自分自身を純客観化して無と化し、そのうえで質的に対立する両者を絶えず総合してゆこうとすることにおいてきままる。」⁵⁾

ここで「伝達の二重化」と言われていることは、すでに述べたように、「二重の内省」の運動が伝達されることを意味すると思われる。そしてこの種の伝達の実現には、「伝達者自身が無となる」という運動が必要になるのである。すでに述べたように、間接伝達実現の基本的条件は、「伝達内容が直接的には理解し難いもの」でなければならない。しかしそのことは、単に難解であるということではない。小学生にとって高等数学が難解であって理解できないという場合、そこに間接伝達が在るのではない。同様に伝達内容が深遠な思索内容であるが故に間接性が出てくるのではない。間接性が出てくるとは「秘密が秘密として」伝達されることなのである。つまりはどこまでも秘されなければならないのである。ではどこまでも秘されるにはどのような伝達構造とならねばならないのだろうか。キルケゴールによると、その第一のものが「伝達者が無化される」というものである。おそらく彼はソクラテースを考えているのだろう。ソクラテース自身は「無知

な者」。「知を産めない者」、として対話者に対する。すると対話者は、ソクラテースが何を言いたいのかを結局は見極めることができなくなる。かくして対話者は自分で自分の中から知を産み出すようになる。これは周知の『テアイテトス』の「知の産婆術」の趣意なのであるが、キルケゴールが間接伝達の第一の方法として考えたのはまさにこの「産婆術」と言えよう。

さて、次に第二の間接伝達の方法についてであるがこれについては次の節で取り上げる。

(二) 神人の伝達形式としての間接伝達

(一)において我々はキルケゴールの言うところの間接伝達の諸属性を理解するためのその本質規定を「秘密が秘密として伝達されること」とみなし、これに基づいて間接伝達の諸問題の解決を試みてきたのであるが、次に(一)に引き続いて間接伝達の方法に関する問題を論究しよう。間接伝達実現の基本条件、つまり「伝達内容が直接的には理解しがたい」を満たすために、第一に「伝達者が無化されること」が要求される。では、第二の可能性とはどのようなものか。キルケゴールの言葉をまず引用しよう。

「しかし、間接的伝達は、また別のしかたによっても起こりうる。すなわち伝達と伝達者との間の関係によってそれが可能になるのである。したがって、第一の場合には伝達者が除外されていたのに対して、ここでは伝達者が関与する。……しかしながら、自分が伝達する事柄のなかにみずから現実に生きている伝達者が存在するからといって、それだけでこの伝達を間接伝達と呼ぶことはまだできない。それに反して伝達者自身が弁証法的に規定されており、かれ自身の存在が内省を経た規定であれば、そこではいっさいの直接的伝達は不可能である。かれはしるし、すなわち矛盾のしるしであり、識別不可能の姿をとっていたもよう。したがっていっさいの直接的伝達は不可能である。」

すでに述べたように、人が二重の内省をしたからといって、その人の伝達が間接性を帯びるとは限らない。伝達には相手が必要なのであり、話者と聴者を含めて間接伝達が成立すると考えねばならない。この条件の中で第一の可能性は、話者が不在となることであった。そうすれば、聴者は話者を見失ない、かくして聴者のうちに二重の内省の運動が生起するからである。第二の可能性は話者は不在ではないが、矛盾的存在として伝達に関わる場合である。キルケゴールはこの引用の

箇所に至るまで、イエスの存在が様々な意味で「つまずき」を生じさせることを詳細に説いている。たとえば、イエスと同郷の人々がイエスの家族兄弟と親しくつき合っているという点から、イエスをそれらの人と同等と考え、イエスにつまづく場合などである。イエスは自ら神の子と称す。しかし、それを伝達するその現実的人間は、飯を食い、排泄する我々と同じ人間ではないか。ここにイエス、つまり神人の伝達が必然的に間接性を付与される原因がある。仮にイエスが神々しい姿で雲にでも乗ってきたのなら、彼の言葉は間接伝達にはならない。これに対し、普通の人間の姿をとって、神の言葉を神として語るなら、聴者は話者を見失なうことになる。それは話者が絶対のパラドックスであるが故である。話者が神にして人であるからである。この場合、伝達は必然的に間接的となる。聴者は話者の真意が分からなくなり、二重の内省というよりは、話者を信ずるかつまずくかのいずれかの岐路に立たされる。そしてこの時、「秘密が秘密として伝達される」ことになる。なぜなら、信仰の道は秘密にされていた道であり、誰も行ったことのない道だからである。それは自己の道であり、この道に自己も在るからである。

以上我々は間接伝達の本質とその様態について根本的究明をしてきたのであるが、ここで我々のたどってきた道が方向性として誤りでないことを確認するため、キルケゴールの専門的研究者の見解をみておきたい。Walter Lowrie は『キリスト教の修練』の英訳の中で、「二重の内省」(double reflection) について次のような注釈をしている。

「この言及は実際には一人の偽名作家、ヨハネス・クリマクスに対するものである。彼は『後書』の中で『二重の内省』によって何が意味されているのかを十分にではあるが、しかし明快とは言えない仕方の説明している。私はあえて不安に思いつつ私の言葉でこのことの要点を表現しよう。客観的思考家はそのみずからの反省の結果を直接的に完全にうまく伝達することができるのに対し、『主体的実存的思考家』は、彼が到達した真理が彼の実存と『関わる』ということ、そしてそのようなものとして、単にそれが他の人に手渡されるだけではなく、わがものとされ、自分のものとなり、それがもともとそれによって得られたその同じ内省の過程を通して獲得されなければならない、という更なる内省の中で伝達への妨げを発見するの

である。それ故、伝達は間接的であらねばならず、他者を促がして自分で事柄を考え抜くように人為的に考察されねばならない。一方で伝達者の主体性は隠されたままになるのである。」⁷⁾

このLowrie の二重の内省の解釈とそれに基づく間接伝達に対する見解は、我々のこれまでの論究とその方向性に於いて一致している。我々は間接伝達の本質が、「秘密を秘密として伝達する」ところにあることを導き出したが、この規定からLowrieの解釈がすべて理解されると言える。

㊦ 間接伝達の根本問題

以上、我々はキルケゴールの間接伝達の思想の本質を探ってきたのであるが、この探究の道程に於いて根本問題としてつき当たるものが在ることを知る。それは、間接伝達の間接性を生じさせる本質規定である。「秘密を秘密として伝達する」ということのいわば存在論的根拠付けの問題である。すでに述べたように、「秘密」という言葉自体、伝達の内容を含んでいる。とすれば、真の意味での「真理」とは伝達に於いて在るのではないだろうか。伝達と真理が必然性の谷間で出会うところ、それはどこにあり、そしてそこで何が起っているのだろうか。それはハイデッガー的に言えば、存在論的問いであろう。この問いかけにキルケゴールは少しも答えてくれない。ハイデッガーの指摘のように、キルケゴールの問題性の視野はある限界をもっているといえる。我々は間接伝達の根本問題を探るために必然性の谷間へ降りて行かねばならない。この谷間を我々はエックハルトの哲学の中に見い出す。

第二章 エックハルトの「言」の哲学にみられる間接伝達的なもの

第一章で考察したように、キルケゴールの間接伝達の思想の全体を理解する原理的規定は、「秘密が秘密として伝達されること」であった。従って主体的真理とは、ある何か固定的、絶対的、客観的真理ではなく伝達の要素を本質として含む、いわば伝達の真理という意味での「秘密」でなければならない。もちろん、ここで言う「秘密」とは、すでに述べたように、本質的の秘密であり、伝達されて内容が知られればすでに秘密でなくなるような、たとえば国家秘密といったようなものではない。つまり本質的の秘密とは伝達されても決して明かされることのない秘密なのである。こうしたことが可能になるには、伝達を受けとる者のうち

に秘密が形成されればよいわけである。しかし、伝達者と伝達の受け取り手が同一内容の秘密を持ったとしたら、それはやはり一種の秘密の暴露であり、「秘密が秘密として伝達されること」にはならないだろう。しかし、だからといって伝達者が伝達しようとする真理と伝達を受けた者の内に宿った真理が全く別々のものであったなら、それは伝達とはならない。「伝達する」に相当する英語の〈communicate〉の語源、ラテン語の〈communicare〉は「共にあずかる」の意味を持つ。つまり、伝達とは何かあるものを共有することなのである。それ故、間接伝達といえども、伝達の一形態である以上、伝達に与かる両者は何か共有するものを持つようにならねばならないと言える。それ故、伝達の出来事のうちに生起するこの共有されるものそのものがどのような本質を持つものかが問題になる。

こうした問題性を保持しつつ、我々は以下、マイスター・エックハルトの「言」の哲学を考察する。

㊦ 三位一体論に於ける父・子関係と「言」の哲学

この節で私はエックハルトの『ヨハネ伝註解』の特に第一章の部分に関する長い彼の解釈を一貫して流れている基本思惟の構造を解明する。従ってその長大な註解部分の一般的解説を省略する。そして真理と伝(または連絡)との関係を明らかにしたい。ここで「伝」あるいは「連絡」という概念を持ち出したが、論の進展とともに規定されるであろう。しかし、簡単に説明するなら、「伝」とは人間と人間の間での伝達に対し、神と人間の間での真理の授受を言う。すなわち、エックハルトの哲学の根本語の一つである出生(generatio)の実存論的訳語といってもよいだろう。

『ヨハネ伝註解』の序文の中でエックハルトはまずヨハネその人がどのような人物かを述べている。エゼキエル書の第十七章に、「巨大な羽のワシが、その肢体はよく伸び、その羽毛は豊かで種々の色彩をもっているのだが、それがレバノンに来て杉の精を運んだ。その枝の頂きを引きちぎり、それをカナンの地へ移した。」とあるが、エックハルトによれば、このワシがヨハネ福音書の記者に当たるのである。そしてヨハネは「御父のふところの中で言(verbum)そのものを吸収して」、それを地上の人々に示した。それが、「始

めに言葉ありき。」であったのである。それ故、エックハルトはアウグスチヌスの「福音記者の中で、(ヨハネは) 神的神秘の深さに於いて卓越している」という発言を引用し、ヨハネの優越を強調している。

しかし、エックハルトがこの最も深く神的神秘を汲んでいるヨハネ福音書を解釈する際に意図したことは「聖なるキリスト教信仰と両聖書が与えるものを、哲学者等の自然的理性によって説明すること」とされる。更にエックハルトは、神的神秘を自然的理性によって説明するだけでなく、自然的なものの諸原理や結論が聖書の中にほめかされていることを示したい、と述べている。

この何気ない解釈の基本姿勢の表明の中に私は遠く伝達と真理との関係を知らせる音を聞く。エックハルトが引用している言葉、「なぜなら、神の不可視な性質は地上の知性的被造物によって、作られたものを通じて認められる」の中に、伝達のある種の間接性がほめかされているようにみえる。

さて、ヨハネ福音書の冒頭の言葉である、「始めに言葉があった。」(in principio erat verbum)をエックハルトは一貫して「始原の中に」(in principio)「言があった。」と読むのである。この一貫した解釈が依拠する思惟原理の構造を以下の論究で明らかにしてゆきたい。まず我々は、始原 (principium)と言の関係を次の引用を手引きとして理解しよう。

「始原そのものから作られたすべてのものは、始原から由来するものによって生じ、そしてそれによって作られたものでなければならない。その理由は、始原と始原から由来するものは一つであるからである。神ハ言デアッタ。のだから、更に、始原から由来したものである限りの始原から由来したものは、明かし(manifestivum)であり、もしくは始原である限りの始原の全体を明かし、そしてみずからの中に運ぶ言なのである。つまり、魂の中の家の形相は、建築家である限りの、そして家の始原である限りの建築家の全体の表現であるからである。」⁸⁾

このように、言は始原を「明かす」(manifestare)という機能を持ち、またそこにその意味を持っている。それは類比的に建築家の精神に抱かれる家の形相に相当する。家の形相は未だ現実的な家ではないように、言もまた現実的な被造物そのものではないが、それらの基になるものである。エックハルトはこの関係、すなわち始原と言、そして言と被造物の関係をそれぞれ

同一義的、類比語的と規定する。

言と始原の機能的関係は以上のように、「明かす」関係である。それではこの機能的関係を成立させている構造的関係はどのようなものなのだろう。

始原と言の構造的関係を明らかにするために、義と義人の関係を説き明かしているある箇所を次に引用する。

「それをより一層明らかにするために、我々はそれをすでに述べた例に於いて、つまり義人と義そのものの例に於いて語りたい。すなわち、義人その人が証人であり、ただ彼のみが義が在ることの誠実な証人なのである。義人は語り明かすのである。つまり外部の他者に語るのであり、義そのものが在り、それが何であるか、そしてどのようなものかについて証言するのである。私は言うが、義人は義の中に、義の胸元に、すなわち義の最内奥に存し、とどまりながら、義そのものの中で義そのものから生まれ、義を見るのである。」⁹⁾

ここでエックハルトが義と義人の関係を示して説き明かしたかったことは、始原と言の構造的関係に他ならない。この引用の前半は始原(義そのもの)と言(義人)の機能的関係を述べている。それに対し後半はその構造的関係が明確な語り方で明らかにされている。すなわち、言は始原の中で、始原から産まれる。そしてそれは始原を見るのである。そしてそのことによって言は始原の最内奥に滞在できるのである。そしてこの構造的関係に於いて言は始原を明かす機能を持つのである。言は「滞在する」という基礎構造に於いて、「明かす」ことができるのである。そして「滞在する」とは始原から「出生し」、それを「見る」ことに他ならない。ここで「滞在する」(manere)はまたこの引用に於いて「立っている」(stare)と同等の意味で語られている。従って言はある停滞なのである。始原がそれ自身の中である停滞を産み出すことによって、始原は見られ、そして始原はこの停滞によって明るめられるのである。

さて、次にこうした停滞としての言の出生(generatio)は始原のどのような概念に基づいて可能になるのであろうか。この問題は、ヨハネ福音書の「そして言は神とともにあった。」という聖句と関係している。

エックハルトは始言と言の関係をしばしば原像とその像の関係で説明する。我々は実在を实在そのものによって認識しているのではなく、实在の像を受け取ることによってその实在へと通じるのである。この实在

(原型)とその像との関係を考察して、エックハルトは次のように語っている。

「もしも実在がそれによって見られ、認識される像が、その実在と別であるなら、もはやその像によってまたその中で実在は認識されないであろう。更にもしも像が実在と全く区別されないものなら、その像は認識にとって無意味となろう。」¹⁰⁾

ここから明らかなように、実在とその認識のために実在から発出する像は、異なるものであってはならぬが、また区別されねばならないという関係にある。この関係をエックハルトは〈unum〉という概念で示すのである。

「それ故、像は(原像)と一つ(unum)であるが、非一人(non unus)でなければならぬ。」¹¹⁾

ここで〈unum〉と〈unus〉が概念的に区別されるが、この区別は単に中性と男性だけの区別ではもちろんない。先の引用で明らかなように、〈unum〉の概念は、「異なるものではないけれども区別がある」一性、すなわちある差違性を含む一性を表わしているのである。それ故、〈unus〉の概念はそのような〈unum〉の概念に含まれているいわば「最後の」差違性が取り除かれた完全な一性を示すものといえる。このことについてはL. W. のドイツ語訳に付けられた註によっても確認できる。

さて、始原はその本質が「一」であるが、そこには概念的な区別が存しているといえる。なぜなら、始原がすべて〈unus〉の概念で支配されているなら、像としての言が出生する可能性が全くないからである。それでは始原を支配する概念は〈unum〉だけなのだろうか。論理的にはそれだけでよいと言える。しかしエックハルトによれば、〈unum〉の概念に基づいて生起する出生、すなわち言の発出、機能的には「明かすこと」はある制限を受けているのであり、この制限の可能的根拠は始原に於ける〈unus〉の概念なのである。次の引用によって上記のことを確認しておこう。

「胸奥の中に存在する子は、父に属するすべてを説き明かす。すなわち、存在、生命、認識、働き、知識愛、本質、能力、そして一つであって分けられないすべてのもの、父と子に於いて一性と非差違性に属するすべて、このすべてを、私は言うが、子は父の胸奥に在る限り、つまり最内奥にある限り説き明かす。そして子は非パーソナ的には父と異なるものではないのだから、父を何かあるものである限り、そして父が〈u

num〉である限り説き明かし、そして父を彼が誰かある者としては説き明かさず、そしてまた何であれ、父とは別のもの、あるいは父とは異なるものを味わうものを説き明かさない。しかし、子は父から生まれた者、義からの義人としてパーソナ的には父とは異なるのであるから、子は父がある者である限り、彼が異なる者である限り説き明かし、父の中で差違性を味わうすべてを説き明かすのであるが、一性に属するものの何一つとして説き明かさない。」¹²⁾

ここで言われていることを〈unum〉と〈unus〉の概念的区別の論理に従って整理すると次のようになるだろう。

(一) 子は本質に於いて父と一つ、すなわち〈unum〉であるから。

① 父を何かのもの(中性)として、そして〈unum〉として明かす。

② しかし、父を誰かある者(男性)として明かすこともないし、また父の本質とは異なるもの(中性)も明かさない。

(二) 子はパーソナ的には父とは異なる。つまり〈non unus〉であるから。

① 父を誰かある者(男性)として、異なる者として、そして父に於いて差違性を示すすべてのもの(中性)を説き明かす。

② しかし、父に於いて一性に属するものを明かさない。

このように言は始原を明かすのであるが、それは始原に於いて〈unum〉の概念が支配する限りであって〈unus〉の概念が支配する領域については、否定的にし明かすことができないのである。とりわけ、最後の箇所、〈nihil eorum quae unitatis sunt〉は明らかに中性で示されているところからすれば、〈unus〉の支配に於いて中性的な何か永遠に闇の中にとどまっていると判断されなければならない。言の出生の概念的根拠は〈unum〉であり、それはエックハルトが他の箇所でも述べているように、差違性を含んだ一性として規定されるのである。そして言は始原の本質を余すことなく「明かす」(manifestare)のであるから、純粋な一性におけるある中性的なものは、「非本質」でなければならない。

以上、我々は三位一体論に於ける父-子関係がエックハルトに於いてどのように解釈されているかを簡単に見てきたのであるが、そこに「明かすこと」につい

での根本的探究がなされていることを認めることができる。私がすでに提示しておいた「伝」、または「連絡」とは、この「明かすこと」を意味するのである。連絡はある差違を含むかぎりの一性の出来事といえる。その限りそこには何かの間接性が残存しているのである。この間接性が明るくしているのである。しかし、連絡は〈unus〉の概念の近くの出来事として、一種の間接的伝である。〈unum〉と〈unus〉を始原に於ける二つの部分のように表象してはならない。そうではなく、むしろ〈unum〉は〈unus〉の近くにあって〈unus〉を間接的に連絡していると考えべきなのである。すなわち連絡は秘密を秘密として伝えているのである。私は始原に於ける言の出生を間接伝達のいわば存在論的根拠ととらえるべきことを主張したい。すなわち、間接伝達の本質規定、「秘密を秘密として伝達すること」は最も根源的には、「近寄らせること」なのである。真理は、「そのあたりらしい」という意味を持つ伝達の真理であり、相対的なものと言える。

もちろん、この私の考えの根拠はエックハルトから伝達された論理に基づくのであるから、これも絶対的とは言えない。しかし、私の論理もまた「そのあたり」の出来事なのである。「そのあたり」の「その」はもはや非本質であり、「何かあるもの」では全くない。

以上のように、言の出生は、間接的連絡という意味を持ち、この連絡によって、「そのあたり」が成るのである。そして「そのあたり」が成ることは、「秘密が秘密として伝わること」に他ならない。

(二) ドイツ語説教にみられる間接的連絡に基づく く間接伝達の例

(一)で論じてきた結果から、我々はエックハルトの言語の本質を次のように理解すべきである。すなわち、その言語は間接的連絡的真理、いいかえれば相対的真理を話者と聴者が共有すること、すなわち間接伝達を生起するようなものである、と。

さて、このようなエックハルトの言語の本質規定を彼のドイツ語説教の一部を引用することによってその正当性に関して確認しておくことにする。

〈Intravit Iesus in quoddam castellum...〉
(イエスはある小城へに入った。)(Lus. 10. 38) についての説教は、エックハルトの基本的な聖書解釈の態度を示す典型的なものとして有名であるが、ここで彼は次のような解釈をしている。

イエスが小城へ入って来る。とは我々の魂の自我性(我執)が取り払われ、そこに於いて神の言葉、つまり言が聞かれること、すなわち、〈manifestare〉が実現すること、我々の概念を使うなら、間接的な連絡がされることを意味するのである。そして「小城」を説明してエックハルトは次のように語っている。

「この小城はそのように全く一であり、単純であり、そしてこの一なる一〈einic ein〉はあらゆる様相と力を超えているので、そこへは、力も方法ものぞき見ることはできず、また神御自身すらうかがうこともできないのである。」¹³⁾

これは間接的伝達による言語であり、直接的伝達によるものと取ってはならないと思われる。我々はこの言語によって「そのあたり」を共有できるだけであり「そのあたり」が共有されることによって秘密が秘密として伝達されるのである。我々はこの言語を真の意味で会得する時、「そのあたり」を経験し、ある秘密、全く明かされない秘密を抱くのである。それ故この言語はたとえなどの修辞法で飾られた言語ではないのである。この「明かされない秘密」は、「神御自身ですらうかがい得ない」と表現される事柄に他ならない。

ところで、こうしたいわば伝が絶たれた領域は、それをたとえば宇宙空間に在って地球から余りにも遠いため、まだ光がとどかず、それ故実質的には存在しない星々のように取ってはならない。なぜなら、そうした星々は確かに連絡されてはいないものの、連絡の可能性までが失なわれているわけではないからである。伝えられ得る可能性の点では、私の目の原稿用紙と何ら異なることはないのである。「神すらうかがえない」ところ、すなわち「小城」、概念的には〈unus〉は連絡の可能性そのものが無いことを示す印なのである。しかしこの「小城」こそ間接的連絡によって「伝えられるべき」秘密なのであり、明かすことによって隠れてしまう「神性の闇」に他ならない。

さて、次に間接伝達が主体と主体を分離させる効果を持つことをすでに示しておいたが、間接的連絡が成就すると、そこに神と人間との分離が生ずることを示したい。秘密が秘密として連絡されると、そこに間接伝達と似たような伝達者とその受け取り手の間の隔絶が生じるのである。そしてこの関係の隔絶によって伝達者とその受け取り手は各々、自由を得ることができるのである。

ある説教の中でエックハルトは、聖パウロが「私は

神と分かれていたい」と語ったことに関して、この言葉が完全性の表現であるとみなし、それについてこう説明している。

「人間が放下できる最も高く、そして最も極端なことは、神の故に神を放下することである。今や聖パウロは神を神の故に放下したのである。彼は自分が神から受けたものすべて、そして神が彼に与えたものすべて、また彼が神から迎え入れることのできたものすべてを放下したのである。彼がこれらを放下した時、そこで彼は神の故に神を放下したのである。」¹⁴⁾

「放下する」は中高ドイツ語の〈gelazen〉の訳語であるが、lassen, loslassen, verlassen等の意味を持っている。「放下」は単に無神論的立場に立つことではない。それは、まだ「神から受けた」経験をしたことがない我執にとざされた立場であるにすぎない。「神から」が受けた事となった時、その経験は人を決して無神論者にしない。「放下」とはこのいわば初関の更に奥の出来事なのである。「放下」は、我々のこれまでの論の展開からすれば、間接的連絡の真の成就ということと考えられる。すなわち連絡が不可能になることなのである。

「放下」によって神から分かれたること、それこそ真の間接的連絡の出現の理由であったのである。そしてこの連絡の成達はすなわち、人間が自由を得、そして真の意味で主体性を回復することなのである。こうエックハルトは語っているからである。

「彼は神に何もかも与えなかったし、神からいつも何もかも受けなかった。そこにあるのは一なるものであり、ある純粋な一致(統一)である。ここに人間は真人(本当の人間)である。」¹⁵⁾

〈ein war mensche〉という言葉は一つ概念と受け取るべきであろう。なぜなら、「真人」はニーチェの「超人」と同様に、エックハルトの哲学全体を構成する論理構造を含む概念性に於いて理解され得るからである。しかし、いずれにせよ「真人」は真の意味で神から間接連絡によって神の真理を伝えられ、主体的自由を得た人と言うのである。そこでは、「秘密が秘密として伝えられること」という間接伝達の本質規定が実現されていることになる。

(三) 間接伝達と間接連絡の関係

第一章で我々はキルケゴールの間接伝達の本質が、「秘密を秘密として伝達すること」と規定されることを示した。しかし、この規定に於いて、「秘密」

の概念が未だあいまいであることを明らかにしておいた。つまり、伝達とは何かを共有することであるのだから、「秘密」を同一なものとするなら、秘密としてという限定が不可能になるという点である。この困難は、間接連絡という真理の新しい理解の仕方を導入することで克服された。すなわち、「秘密」とは間接的に神から人間へと「そのあたり」が連絡されることであり、これが伝達に於いて共有される事柄であることにより、各自が各自の「明かされないこと」を所有しながら、しかも「そのあたり」という点で同一の出来事を分かちあえるのである。そして間接連絡が間接伝達され、真に成就する時、各々の人は主体的な自由を得ることができるのである。

結 語

真理は〈unum〉に属するある出来事とするなら、真理の本質には差違性、つまり、「それと異なる」という本質規定が含まれている。そして、「それ」と異なることによって、真理は「それ」の近くに起こり、「それ」とのある関係性に於いて存在するものとなると言えよう。この関係性が連絡の生起の概念的根拠となる。もちろん、「それ」は永遠に秘密となっている「神性の闇」である以上、すでにプロティノスが語っているように、「それ」とも言えないものである。哲学が何らかの意味で問い、そして明かす営みとするなら、哲学の外にある闇、それが間接伝達によって伝えられるべき秘密なのである。

それ故、我々が哲学的に思惟しようとする時、その思惟の本質の中には「近さ」または「接近」という事柄が含まれていなければならない。たとえば、ヘラクレイトスの最も短い断片は、このことを示しているとは言えないだろうか。— アンキバシエー(接近) —。ハイデッガーはこのヘラクレイトスの断片を彼自身の哲学の歩みを最も美しく示す言葉として受け取っている。また、西洋の神秘主義思想の源となったプロティノスは、ヌースをト・ヘンの近くにあるものと規定している。そしてエックハルトもまた、「近さ」について特別の関心を向けるのである。彼はアウグスチヌスの言葉をしばしば引用し、「近さ」について言及する。「私は自分自身に近いよりも神に近い。」と。

しかし、「接近」(アンキバシエー)は、接近されるものにとって一体、何の意味があるのだろうか。「それ」、つまり「神性の闇」には接近がないのである。

「接近」の意味は何なのか。哲学的思惟はそこに一つの強い関心を持つのである。「近さ」、そして「接近」については次の機会に更に論じたい。

引用文献

- 1) キルケゴール著作集 7. 杉山好, 小川圭治訳. 白水社 1982年, P 136
- 2) 同上, P 130
- 3) 同上, P 135
- 4) 同上, P 132
- 5) キルケゴール著作集 17. 杉山好訳. 白水社 1984年, P 197
- 6) 同上, P 199
- 7) S. Kierkegaard, Training in Christianity Translated by Walter Lowrie, Princeton University press, P 132
- 8) Meister Eckhart, Die lateinischen Werke ■ (LW ■) hrsg. in Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, stuttgart 1936ff P 117
- 9) 同上, P 139
- 10) 同上, P 162
- 11) 同上, P 162
- 12) 同上, P 166
- 13) Meister Eckhart, Die deutschen Werke I (DWI), hrsg. im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, stuttgart 1936ff P 43
- 14) 同上, P 196 ~ P 197
- 15) 同上, P 197